

三井のリフォーム 住生活研究所 所長 西田 恭子

デザイン・フォーラム

左官職人 挟土 秀平

三井ホームグループでは、デザイン力をグループの強みとして捉え、各社が枠を越え、更なるデザイン力をめざし、ともに活動している。

その一環として行われる合同フォーラムでは、建築・インテリア・リフォーム・エクステリアのデザイナー・集団約二、〇〇〇名から選ばれた作品が、プレゼンテーションされグループ各社全員が大いに刺激を受ける。

次々と日本全国に広げ、塗り壁が作り出すデザインの色を、会場の大画面に映し出して見せ付けてくれた。

「日本の伝統文化を支える職人は今大きな岐路に立っている。職人と建築家と物件に関わる全員が一体となって、どちらが上、どちらが下もなく共に作り上げなければいいものは出来ない」と話されていたことが印象に残った。



してはいけないとの思いから、設立された会だ。

「伝統工法は大工がいなければ実現しません」と語り、後継者の育成と仕事の間を広げる努力をし、一般社団法人化に向けて活動している。

伝統職人の技は徒弟制の中で受け継がれるが、受け継がれた業を生かせる場がなくては継承されない。

今年会場も、昨年一〇月末にオープンした日本橋三井ホールである。革新する伝統の街といわれる日本橋の、新しいイベントホールでの開催は、皆に華やかな思いを抱かせた。

今回の「デザイン・フォーラム」の特別講演講師は、左官職人の挟土秀平氏だった。講演時間は一時間二〇分。最前列で挟土氏の熱い語り魅了されたら、あっという間に講演会は終了した。

挟土氏の講演は、話が上手で面白いことだけでなく、日本の伝統的な塗装の技術を新しい手法で

とまで言われ、自然の力と大地の息吹、そしてそこにある人の営みを大切にしたい作品群は圧巻である。主な作品名も「八ヶ岳マツボックリの野菜蔵」とか「氷雪の壁」とか聞いただけで興味を抱く。挟土氏の左官職人の世界を広げた功績は、大きいと感じる。

先日、「伝統を未来につなげる会」の方の訪問を受けた。日本の風土に根ざした固有の伝統工法。それを支える大工の技と芸を絶や

リフォームの世界に可能性があるのでと思っただけだが、古民家リフォームも単発的で大きな力にはなれそうもなく、仕口を組んでの改修提案はなかなか難しい。

今回は左官職人と大工職と、続けて日本の伝統工法の技について考えさせられる機会を得た。

建築家フランク・ロイド・ライトが「世界中で一番木を知っているのは、おそらく日本人だろう」と語ったと聞き、日本固有の文化と職人との行く先、複雑な気持ちになりながら思いをさせた。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。